

平成 28 年度 第 5 回講演会 記録

日 時	平成 28 年 6 月 11 日 (土) 13:00~16:00
会 場	此花会館 梅香殿
講 師	名城大学大学院総合学術研究科特任教授 鈴木輝明先生
演 題	干潟の機能とその保全
備 考	参加者数 177名 (会員161名、一般16名) 聴講1名、 記録 西尾光市



1. 講演 全国のアサリ資源が激減している中で愛知県、特に三河湾は現在日本一の漁獲量を誇る。何故か？

- ・伊勢湾などの内湾には餌生物が豊富である。その主な要因は、①河川水の流入に起因する海水の密度差による内湾固有の流れが生じ、外海からも豊富な栄養塩類が常時湾内に供給される。②内湾には干潟・浅場や藻場が発達しており、これらの海域には十分な光が到達するため、植物プランクトンや酸素が常時豊富のため多くの動物群衆の生息が可能になる。③湾口が狭いことにより豊富な栄養塩類やプランクトン類が湾内に貯留されることなどである。
- ・夏季に赤潮が発生し、魚介類に大きな被害を及ぼすのは、一般的には河川の汚れによる水質の富栄養化によるものと考えられてきたが、真の原因は、それらを摂食する動物プランクトンやアサリなどの低生動物が「何らかの理由」により著しく減少して生態系のバランスが崩れることによる。
- ・「何らかの理由」の一つが大規模な干潟・浅場の埋め立てによるものであることは、伊勢・三河湾の過去 30 年間の水質変化の調査結果からも明らかである。三河湾では 1970 年～1980 年頃の間湾内合計で約 1200ha(中部国際空港の二倍程度の面積)の埋め立てが行われ、丁度その時期から赤潮発生がみられるようになったのである。調査の結果、アサリの稚貝は三河湾の特定の場所で発生して湾内全体に拡散していることがわかってきた。その特定の場所が埋め立てられると湾内全体へのダメージが大きいこともわかってきた。幸い、三河湾では、そうした特定の場所が比較的多かったことで、生態系への壊滅的な影響は免れてきたといえる。
- ・そうした知見をベースに三河湾外に堆積していた大量の砂を用いて干潟の再生を各所で図った結果、赤潮が発生しない海の環境を取り戻すことが出来た。その結果、全国的にアサリの漁獲量が減少する中で、三河湾のアサリ出荷量は、今日では全国の 60%を占めるに至っている。
- ・豊かな海を実現するためには流入負荷管理や極浅海域の保全・修復について縦割りを超えた真摯な議論とともに統一的行動が必須である。
- ・河川が上流から海に運んでいた良質の砂が、ダムによってせき止められてしまっている。
- ・最近の大学の水産学は、養殖技術などによる水産資源の確保や、そのための餌づくりなどの研究に偏っている風潮がある。そんなことより大自然の正常な営みに着目して保全・再生することの方がより生産的である。

2. 質疑応答

質問① せっかく造った人工干潟が東南海大地震の津波対策として海岸線がコンクリートで固められてしまうことにならないか？

回答 アサリの保護をあまり声高に言い立てると、人命とアサリのどちらが大切か・・・などと言われてしまうし、難しい問題だ。

質問② 瀬戸内海の赤潮発生については改善方向に向かっているのか？

回答 三河湾に比べて、瀬戸内海の播磨灘などは干潟が少ないので、対処方法は同じではない。

質問③ 三河湾で研究された知見は、日本全国の他の海域にも生かされるべきではないか。

回答 そのとおりであるが、干潟造成に必要な砂の確保が非常に困難。

◆田中先生からの締めくくりのお話し要旨

鈴木先生のお話は極めて実践的であり、長期に渡る緻密な調査活動の裏付けがあり説得力がある。しかも、あるべき姿を希求しての将来に向けての展望もお持ちである。複雑な利害関係が交差する会議の場においては、いつも冒頭で持ち前の迫力で率直に自論を展開されるが、最後には会議をまとめる方向にて提言をされている。永いおつきあいがあるが、本日のお話しにはあらためて感銘した。